地域とのつながりを大切にするベジファームゴトウ

（ベジファームゴトウ）

所属	統計部生産流通消費統計課	氏名	関原　優真
研修先市町村	岐阜県本巣市	研修期間	令和６年 10 月 28 日～ 11 月 22 日
経営形態	法人経営	栽培品目	野菜 11ha、柿 75a、いちご 28a

地域概要

岐阜県農業は、「日本の縮図」ともいえる変化に富んだ自然条件と大消費地に比較的近い立地条件を生かして多彩に営まれている。美濃から飛騨にかけて多種多様な作物が周年にわたって栽培され、いつでも新鮮な農産物が供給できるということが特徴となっており、主な銘柄品は水稲「ハツシモ」をはじめ、「富裕柿」、「飛騨牛」などがある。

農村研修の目的

農村研修の目的としては、岐阜県岐阜地域での農業の現状や課題を学ぶこと、高齢化や担い手不足と言われている中ベジファームゴトウではどういった対応を行っているのか学ぶことを目的とした。岐阜地域では高齢化や後継者不足の影響で農家は減少傾向にあり、農地を手放す人も増加しているなか、ベジファームゴトウでは季節ごとに生産品目を変え、１年間で約 50 種類の野菜を生産し、従業員も 20 名ほどと安定した経営を本巣市で行っているため、どのような取組を行っているのかを学びたいと考え目的を設定した。

農村研修の内容



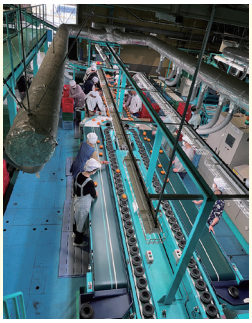
①サニーレタスの収穫作業

葉が大きくなったものを一つ一つ包丁で根元を切り収穫していく。写真中央にある台車を押してケースに詰めていく。濡れたままでは出荷ができない野菜もあるため、天候を見通して次の日の出荷分も収穫するなどスケジュール管理が大切であることを学んだ。



②柿のカメムシ被害

今年はカメムシが大量発生し、柿に甚大なる被害がでている。写真の凹みがある箇所については全てカメムシにかまれた跡であり、今年は特に被害がひどいそうで、写真のような状態の柿が全体の７割以上を占める事態となっていることを学んだ。



③ JAぎふ　柿の選果場見学

JA ぎふで柿の選果場を見学させていただいた。大きさや糖度を機械で判別し、従業員によって箱詰めされ、出荷するまでの流れを学ぶことができた。今年は深刻な柿不足で、例年の半分以下となっており柿不足の深刻さを感じることができた。

研修の成果・農林水産省で活かしていきたいところ

本研修では、ベジファームゴトウで野菜の収穫、包装、出荷等の作業のほかにも、農業委員会の傍聴、指導農業士の方との意見交換会、新規就農者との意見交換会などに参加させていただいた。様々な分野の農業に関わる方と意見交換する機会をいただき、農業に対する熱意や行政に求めていることなど幅広く知見を深めることができた。農家さんと意見交換をする中で課題として共通していたのはハウスや機械類の資材費高騰であった。最も課題として意見が多かったのは修繕に係る費用で、導入時には一定の補助金がでるが、修繕の時には一切の補助がないため金銭面で大きな問題を抱えている農家さんが多く見受けられた。この問題に対しては、農業を長期的にやろうと考えている農家の負担を軽減するような仕組みが必要であると感じた。

ベジファームゴトウは、JA の直売所やイオン系列の産地直送コーナーに主に出荷しており、地産地消で新鮮な野菜を提供することを理念として経営を行っている。その結果昔からの根強い顧客が多く、会社まで直接買いに来る方も本研修中に何度も見られた。

従業員が 20 名ほどいるが、年齢層は高くまた定植から収穫、出荷まで手作業で行っているため大変な労力が必要であり、今後さらなる従業員の高齢化に備え農地の縮小を考えているそうで、生産量の減少も考えられるため早急な対応が必要だと感じた。

謝辞　私を受け入れてくださったベジファームゴトウの皆様には繁忙期であるにも関わらず、多種多様な経験をさせていただき大変感謝しております。また、研修の調整をしてくださった岐阜県庁及び農林事務所の皆様にも感謝しております。 皆様のおかげで充実した時間を過ごすことができました。研修で培った地域との関係を忘れず、農林水産業の発展に貢献できるよう勤めてまいります。本当にありがとうございました。

次世代を育て、地域を代表するトマト農家

（垣根　真吾氏）

所　　属	農産局地域作物課	氏　　名	佐々木　悠祐
研修先市町村	岐阜県高山市下切町	研 修 期 間	令和６年９月 21 日～ 10 月 24 日
経 営 形 態	家族経営	栽 培 品 目	トマト (0.7ha)、水稲（３ha)、メロン（１ha)、作業受託水田（６ha 以上）

地域概要

高山市は岐阜県の北部に位置し、内陸性気候で寒暖差が大きく、特に夜間の冷え込みが厳しい。農業生産については、年間 200 億円を超える販売額があり、「飛騨トマト」など共同出荷される高冷地野菜が、令和５年生産販売額の約 50%を占めており、「飛騨牛」として全国ブランドとなった肉用牛を始めとした畜産が占める割合も 40%を超えている。なお、平成７年度から農業経営改善計画の認定を進めており、認定農業者数は岐阜県内では最多となっている。

農村研修の目的

新規就農者支援に力を入れている高山市において新規就農者の育成について学ぶこと及び、地域の気候や特色を生かした農業について学ぶことを研修の目的とした。当方は普段、さとうきびを始めとした離島における農業に関連した業務を担当しており、新規就農支援への関心が高かったことから、農家の方の視点から支援策を学び、産地が抱えている課題について学びたいと考えた。また、実際に農作業を行った経験がないため、収穫作業及び管理作業を経験し、農業者の普段の生活を知り、課題を把握したい。受入農家の垣根真吾氏は、複合経営かつ６次産業を進めており、加えて、指導農業士として若手の育成にも力を注いでいることから、これからの日本の農業のあり方のモデルケースとして学びたい。

農村研修の内容



①「稲の収穫作業」
天候等の状況を見つつ、計画的に収穫作業を行う。基本的には機械収穫であるが、降雨後のぬかるんだ田んぼでは、機械の故障にもつながることから深追いせず、収穫困難な場合には手刈りで収穫作業を行う。



②「トマトの収穫と箱詰作業」
登熟度を確認しつつ、トマトを収穫。傷や色を確認しながら出荷し、選果機を用いて大きさごとに分けた後、出荷用の箱へ詰める。出荷に適した色を見分けることの難しさを体感した。



③「新規就農者との育成」
新規就農者として垣根氏の下で研修している方とのコミュニケーションを取り、疑問や不安なことなどを聞き取り。実際に研修生とお話することで、現場の状況を学んだ。

研修の成果・農林水産省で活かしていきたいところ

本研修において学んだことは大きく２つあり、１つ目は、現状把握の重要性である。高山市は、冷涼な環境であるのが特徴であるが、研修中には、多くの農家の方々から、近年は 10 月上旬になっても夏の様な気候が続いており、昔とは明らかに気候が変わったという話を多く聞いた。垣根氏の下で研修をする中で、こうした状況を受け止め、管理作業等において様々な対策を取っている姿を多く見ることができた。変わっていく状況の中で常に工夫しようとする姿は、当方が日々業務に当たる際にも忘れないようにしたいと思う。

２つ目は、コミュニケーションの重要性である。研修中には、地域全体として、農業に関係ないような内輪話から病害虫被害等の作況につながる情報まで、互いにいつでも連絡できるようなつながりを感じた。特に、垣根氏は新規就農者の育成や農業大学の学生の研修も担っていることから、彼らと頻繁にコミュニケーションを取り、気軽に電話できる関係を築いており、新規就農者にとっては、とても良い環境であると思うとともに、地域全体の活性化にもつながっていくと感じた。コミュニケーションについては、当方が農林水産省においてどのような業務に当たるとしても重要であり、周囲との情報共有を大切にしていきたい。

謝辞　このたびは約１ヶ月間に渡って、農林水産業について学ぶ機会を設けていただき、ありがとございました。また垣根さんのご家族の皆さまにも大変お気遣いいただき、、第２の故郷のように思うほど、本当に居心地がよく、楽しく勉強させていただきました。本当にありがとうございました。

日本一の生産量を誇る「飛騨ほうれんそう」の農家

（横畑　守氏）

所　　属	経営局金融調整課	氏　　名	井手上　展大
研修先市町村	岐阜県高山市	研 修 期 間	令和４年９月 22 日～ 10 月６日
経 営 形 態	家族経営（妻、子、祖父母）／パート従業員８名）	栽 培 品 目	ほうれんそう（170a）

地域概要

高山市は、岐阜県の北部、飛騨地方の中央に位置し、内陸性気候で、寒暖差が大きく、特に夜間の冷え込みが厳しい。農業生産については、年間 200 億円を超える販売額があり、日本一の生産量を誇る「飛騨ほうれんそう」を始め、「飛騨トマト」など共同出荷される高冷地野菜が、約 46％を占めている。また、「飛騨牛」として、全国ブランドとなった肉用牛が、約 44％、米が約 6％である。

農村研修の目的

研修の目的は、ほうれんそうの産地としてのメリットや、農作物の栽培方法について学ぶこと。実際に農作業を行った経験がないため、栽培管理やノウハウについて学び、農業の楽しさや難しさを肌で感じ、農業者の視点から国の政策や普段の生活について学びたいため。また、現在、融資等の関係の業務を行っており、農業者の方の身近で働くことで、資金繰りについて学び、農業に必要な機材の調達や、運転資金について等、農業者になったつもりで、今後の職務で農業者のために必要な政策を立案できるようするため。受入農家の横畑守氏は、市内屈指のほうれんそう農家で、指導農業士ということもあり、若手の育成について等、多くのことを吸収したいと考えた。

農村研修の内容



①ほうれんそうの収穫作業

受入農家のご家族と共に 16 時頃からビニールハウスで栽培しているほうれんそうの収穫作業を行った。根切りの機械で刈り取ったほうれんそうをコンテナにいれ、トラックに積み、作業場に運ぶ流れだった。効率よく作業を行えるよう役割分担して作業を行っていた。



②ほうれんそうの調製作業

朝７時半から作業を開始し、パート従業員の方々と共に作業を行った。前日に収穫したほうれんそうをすべて手作業により、痛んだ葉や下葉を取り除きサイズ分けをする作業。その後、１束 190 ～ 220 グラム程度に分けて機械で FG フィルムに入れ、1箱に 20 袋ずつ詰める作業を行った。



③飛騨ほうれんそうの特徴

高冷地の冷涼な気象条件を利用し、春から秋にかけて長期間の栽培が可能である。主に近畿地方に出荷されており、暑さに弱いほうれんそうは、高山市の気象条件とマッチし、夏場は市場の大半を占めている。

研修の成果・農林水産省で活かしていきたいところ

今回の研修で学ぶにあたり、ほうれんそう農家は人手が必要であり、担い手の高齢化、従業員の確保などが、今後の課題となると実感じた。全国的に農業従事者が減少傾向にあり、高山市でも、農家の戸数が減少している。現在は、高齢化により農地面積を縮小したり離農したりされた方の農地を現役の農家が借り受けるなどして、販売額を維持している。従業員の不足により、畑で栽培しても出荷できない等の課題があることを肌で感じた。また、高齢化については、電動式リアカーなどの導入もされていたが、重労働による負担がなくなったわけでないこと、トラック等を運転できる人の減少など将来に渡る課題を学んだ。新規就農者の確保については、ほうれんそうの農家になるにあたり、人材の確保が必要であるため、新規就農者にとってハードルが高く、新規就農者より親元就農の方がメインとなっている。高山市では、飛騨農林事務所、市役所、JA により新規就農者の定着に向けて、面談、長期研修などのサポートが行われている。受入農家の横畑氏の下にも長期研修を受けられる方が学びに来ており、農林水産省として、農業を始めたい人に向けて情報発信や支援を行っているため、多くの人々に認識していただけるよう、日々自覚を持ち行動したいと感じた。

また、栽培においては、同じ市内でも標高など地形が異なることから、水やりの方法等が異なっており、経験や知識、機材と特徴などを把握し栽培が必要であり、多忙な１日を過ごしていることを学んだ。

謝辞　このたびは、15 日間に渡りこのような機会を設けていただき誠にありがとうございました。農林水産省の職員でありながら農作業に携わった経験がないため、今回、受入農家の横畑様の下で農作業に携わる事ができ、貴重な経験になりました。県や市の職員、パートの皆様とも交流し、いろいろな角度から農業を学ぶことができました。農林水産に携わる方々のために、より良い政策等を実施できるよう、より一層努めて参ります。

高原野菜を主とする露地野菜作経営

（(有)小松園芸）

所　　属	経営局保険課	氏　　名	笠原　萌
研修先市町村	長野県佐久市	研 修 期 間	令和４年８月 22 日～９月５日
経 営 形 態	法人（従業員 13 名）	栽 培 品 目	レタス . キャベツ . 白菜（18ha） 露地以外にベビーリーフ等の施設経営あり

地域概要

佐久市望月地区長者原産地。標高 900m ～ 1000m の準高冷地で気候は冷涼。産地全体で約 300ha の畑地がある。土質が良く粘土混じりで、地力が評価されている。主として白菜、キャベツの産地（(有) 小松園芸で多く栽培しているレタスは地域としては主流でない）。大阪で評価されブランド産地となっている。東京よりも大阪の方が距離は遠いが、以前よりの付き合いもあり東京よりも関西の方で評価されている。売り上げは産地として 25 億円程度。JA 出荷の農家がほとんど。

農村研修の目的

農作業体験ではなく農村研修という名の通り、ただ農作業を体験するのではなく、農家の人として農村生活を経験することを第一の目的とする。農作業自体は大学の授業でやっており、また、卒業論文のテーマとして都市における体験農業を研究していた。都内にある実家の周りにも体験農園は複数あり、東京都から出た生活をしたことがない自分にとっても、体験農園でジャガイモ掘りやブルーベリーの摘み取りなどの作業を経験することは珍しいことではなかった。ただ、それを生活にすることとはどういうことなのか、仕事としての農業だけでなく農家として農村で生きるとはどういうことなのか、それを学ぶことが本研修の一番の主題だと考え研修に臨む。

農村研修の内容



①レタス . キャベツ . 白菜の収穫作業

朝５時程度の夜明け前から収穫作業をしていた。８月はレタス . キャベツで、９月からそこに白菜が加わり３品種同時に収穫作業がある１年で一番の繁忙期となる。１人につき３列の持ち分があり、そこをひたすら包丁で切り、それをベテランの従業員がすばやく箱に詰めていく。



②レタス . キャベツ . 白菜の卸し作業

箱詰めした作物をトラクターで予冷庫に運び入れる。作物のサイズ別になっている箱ごとに仕分けをして卸していく。一箱 10kg 以上あり、重労働であるが、スピード感をもって行われる。ここで職員と箱数のカウントが行われる。午前中のうちに卸し作業が完了。



③農場の草とり

午後は草取りがメイン。除草剤は散布しているものの、撒くタイミングによって効果が激変するよう。そのタイミングの加減は毎年やっていても難しい。土が葉に散らないように横方向に抜き、抜いた茎を折ったりねじったりすることで再生するのを防ぐ。

研修の成果・農林水産省で活かしていきたいところ

まずは重労働について、農家の実態を経験した。例えば白菜の場合、一つ当たり２～３kg あり、箱に詰めると一箱 15kg ほど。それをトラクターに積んだり下ろしたりすることは想像以上に腰に負担がかかる。それ以外にも鹿除けのネットを農場に張り巡らせたり、農場から石を撤去したりと力の必要な作業は多くある。悪天候下での作業ももちろんある。気温がとても高い日や強い雨が降る日も作業は変わらず行われる。また労働者の確保も課題。外国人実習生を雇用しているが日本語はあまり通じないことも多い。ベビーリーフ等の施設野菜部門では地元の主婦をメインとしたパートタイマーを雇っている。従業員側としては年中同じペースでは働けないことや、繁忙期は休みが取りにくいことなどの障壁がある。人付き合いが密接なのも、農村で少しの間生活するだけでも強く感じた。すれ違う人は顔見知りが多い。車同士すれ違うときは道幅が狭いため譲り合いをするなど人と人の距離が近いからこその思いやりも垣間見える。距離が密なゆえに卸しに行った際、顔見知りの方から作柄について指摘され、時にはだめ出しをされるというようなこともあるそう。さらに、農家で機械化が進んでいる部分も確認できた。箱うち（段ボールを平面の状態から出荷用に組み立てる）等、準備段階の作業にも想像以上に時間と労力が必要。そのため小松園芸では箱うちを機械化していた。トラックに乗せるために組み上げる（例えばレタスの場合は２箱を１セットにする）のは人の手で行われるが、そこまでは全自動で行われていた。

謝辞

研修を受け入れてくださった小松園芸社長、真知子専務、農場長、従業員の皆さまには大変お世話になりました。また佐久農業農村支援センターの篠原課長、新津所長、中澤係長、浅沼技師にも佐久管内概況をご説明いただいたり意見交換の場を設けていただいたりとお世話になりました。さらに、意見交換をさせていただきました佐久市の小泉様および、軽井沢町の市村様にもお世話になりました。本研修に関わってくださった全ての皆さまに心からの御礼を申し上げます。

何事もチャンスと捉える農園

（(有)小松園芸）

所　　属	統計部統計企画管理官	氏　　名	佐野　凜香
研修先市町村	長野県佐久市	研 修 期 間	令和４年９月１日～９月 15 日
経 営 形 態	法人(正社員７人､パート４名､外国人２名)	栽 培 品 目	野菜（20ha） レタス、キャベツ、白菜、ベビーリーフ、ながいも、にんじん、パクチー

地域概要

佐久地域は千曲川の最上流に位置し、群馬県、埼玉県及び山梨県と県境を接している。総面積は長野県総面積の 11.6%、人口は長野県計のうち 10.0% を占め、令和２年時点の農産物産出額が長野県 10 市町村中の首位である。浅間山、八ヶ岳等の高原特有の冷涼な気候を生かした、高原野菜、りんご等の生産が盛んで、五郎兵衛米というブランド米の産地である。望月地区長物原は土質が良く、粘土まじりで地力が評価されており、主にキャベツ、白菜のブランド産地になっている。

農村研修の目的

農業をめぐる情勢について把握することで、どのような課題があり、求められる対策は何かについて学ぶことを研修の目的とする。農林水産統計の調査結果と現状に乖離があると感じるか、統計は農家の仕事上で役立つものなのかについて、研修で関わる方々に意見を聞きたい。また、法人経営を行う上で生じる、新技術の導入や人材育成についての課題や、今後の展望について勉強できればと考えている。実際に農作物を育て、収穫し、販売する過程を体験することで、生産現場ならではの大変さややりがい、消費者の食卓に届くまでの道のりを体感し、農林水産省職員としてどのような支援ができるのか、深く考える期間としたい。

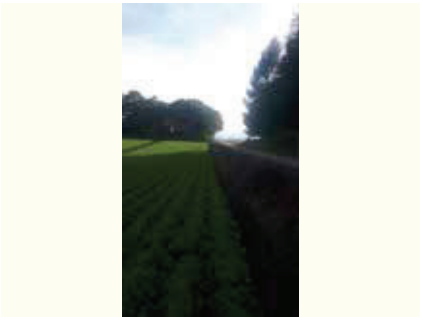
農村研修の内容



①レタスの裁断・箱詰め
日の出前からヘッドライトを付けて収穫作業を開始する。職員全員で、包丁でレタスを裁断し、切り口を水で洗浄する。畑に並べた段ボール箱にレタスを詰め、トラクターに積んでＪＡへ出荷し、予冷を行う。



②収穫を終えた圃場のマルチはぎ
収穫を終えた圃場のマルチを土からはぎ、広げて乾かし､土を落として回収し､廃プラスチックごみとしてまとめる。収穫作業過程でトラクターや箱に踏まれて地面に食い込み、土や草が重なったマルチをはがすのは、重労働である。



③草抜き
午後は畑の草抜きを行う。畑に生える草は、野菜の生育を阻害するので定期的に抜く必要がある。畑は鹿よけの電線で囲われている。

研修の成果・農林水産省で活かしていきたいところ

この研修で最も印象に残ったのは、小松園芸専務の「チャンス」という言葉である。経営を行う上で、農家は労働生産性向上のためのＡＩ・ドローン化はコストが高く１経営体では導入が進まない、求人しても労働力が集まらない、採算の難しい農産物価格、農道再整備の必要性…など、多くの課題と向き合う必要がある。しかし、厳しい状況だからこそ生産実力・経営力があれば頭一つ抜けられるチャンスの時代なのだと聞いた時、農家さんの底力を感じ、良いものを取り入れて成長したいという思いを支援したいという思いが強くなった。農業は、畦を立てる人、定植を行う人、除草剤をまく人など、連携を取って作業を行うことが重要である。しかし、複数の畑で毎日行う作業は管理が難しく、一人一人がプロとしてその場で判断を行う必要がある。新しく就農する人を増やすだけでなく、人を育て、長く働いてもらうことが大切なのだと学んだ。地域の農家の方々にお話を伺ったところ、規模を拡大するほど収入が増加するという統計について違和感があるという意見を頂いた。農地の集積・集約化が推進されている中で、このような現場の声は施策を進める上で無視できない、重要な意見である。また、佐久市農業支援センターで施策を考えるのに統計は必要不可欠と聞いたのに対し、農家さんにとって統計は、仕事にどう生かせるのかわからない、本当に知りたい情報がない、と縁遠いものとして認識されていると感じた。統計部職員として、統計を国民にとってより身近で有用な存在へと変えていきたいと考える。

謝辞　受け入れてくださった小松ご夫婦とそのご家族の皆様、小松園芸社員の皆様に厚くお礼申し上げます。お忙しい中、温かな心遣いをいただき心から感謝いたします。また、佐久市農業支援センターの職員の皆様におかれましては、佐久市の概況説明や意見交換会の手配等、貴重なお時間をいただきましてありがとうございました。最後に、研修に快く送り出していただいた統計部の皆様に感謝申し上げます。研修で学んだことを業務に生かせるよう尽力いたします。

自然栽培で育てた希少品種米を中山間地から海外へ販売

（(株)Wakka agri）

所属	農産局総務課	氏名	齋藤　清大郎
研修先市町村	長野県伊那市	研修期間	令和４年 10 月３日～ 10 月 17 日
経営形態	法人（社員２名等）	栽培品目	米 7.5ha、そば１ha

地域概要

長野県伊那市は、県南部に位置し、稲作が盛んな地域である。研修先では、①ミネラル豊富な南アルプスの水②多くの有機物を含む土③標高差による昼夜の寒暖差など、棚田の特徴を活かした自然栽培で、希少品種米である「カミアカリ」などを栽培し、ニューヨークなど海外へ輸出している。こうした取組も評価され、2018 年には GFP の第１号として登録された。

農村研修の目的

研修の目的は、中山間地における水田経営の現状と課題を学ぶことである。入省後、米政策の担当課に配属され、現在も農産局に在籍する中で、水田農業の現場を知りたいと思っていたため、この研修を希望した。特に、環境へ配慮した生産や海外に目を向けた販売が重要になる中で、様々な条件面で不利と言われる中山間地において、どのように水田経営を行っているのか学ぶことは重要と考えた。さらに、受入先の農業法人は米作りに留まらず、６次化や農泊にも取り組んでおり、経営の多角化についても学ぶことができると考えた。

農村研修の内容



①中山間地の稲作

稲刈りはコンバインによる収穫が基本であるが、人力による落ち穂拾いも重要であると教えていただいた。自然栽培にあたり、圃場環境の条件が揃っていることも強みとのことであり、地域の特徴や強みを活かして「需要に応じた生産・販売」を進めることが重要であると学んだ。



②経営の多角化

受入先の農業法人は、６次化など経営を多角化している。印象的だったことは、海外向けに販売するにあたり、様々なオーダーに応えるべく、試行錯誤を重ねていることである。農業生産以外に収益の柱があることが、持続可能な農業経営に資することを学んだ。



③地域コミュニティの核

改築されたこの建物は通称「東(ひがし)」と呼ばれる。ここは、農泊施設であるほか食堂や事務所も併設されている。食堂では、法人のメンバーが地域の伝統的な食文化や住民のことについて談話するほか、仕事関係の気づきも共有される。

研修の成果・農林水産省で活かしていきたいところ

担い手の確保が課題になる中、新規就農支援と魅力ある農村の形成について、以下のとおり考える。

新規就農にあたっては、里親支援制度の利用を基本とし、独立できる段階に至れば、特定の地域で営農できる仕組みが必要と考える。特に経営マインドは実践者から学ぶのが効果的と考える。その際には、里親支援制度を利用したり、地域を牽引するような挑戦的な営農を行う者には、支援措置を手厚くするなどの誘導措置を講じて、行動変容を促したい。特に、行政の各種支援については、諸課題へ網羅的に対応できるラインナップになっていると思われるが、その内容が現場まで伝わっていないと感じられたため、農政局や自治体主催で、定期的なオンライン相談会を開催し、どのような支援が必要かを具体的に聞き、分野横断的に支援メニューについて情報提供する機会を設けることで、安心して経営できる環境を整えたい。

また、魅力ある農村の形成にあたっては、生活の利便性と安定性を確保する必要があると考える。利便性については、低コストな方法で基本的インフラを整備するなど、資源が限られていることも踏まえ、公共性の高いサービスを提供し続ける方法を模索する必要がある。また、安定性については、半農半 X の推進が重要と考える。農業に加えて、多様な働き方を広げることや、手に職を付けるための支援を充実することなどが必要と考える。

謝辞

農村での生活や農作業に不慣れな私を温かく受け入れてくださった、皆様に感謝申し上げます。この研修で、中山間地における農業の可能性を学びました。また、美味しいご飯を皆さんと食べる中で、「農業は想像以上に大変だけど、「食」を支えるとっても素敵な産業だな。」と思いました。この経験を職業人としての宝物にして、意欲ある担い手が前向きに農業経営を続けられるように頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

山梨県の農業を子供たちの世代へつなぐ大沢農園

（(株)フルーツオーサー）

所　　属	大臣官房統計部生産流通消費統計課	氏　　名	大西　桃子
研修先市町村	山梨県山梨市	研 修 期 間	令和４年 10 月 17 日～ 10 月 31 日
経 営 形 態	法人経営（役員２名、社員２名、短期アルバイト３名）	栽 培 品 目	果樹(2.5ha)(おうとう150a、いちご６a、もも50a、すもも30a、ぶどう20a)

地域概要

山梨県山梨市は、果樹栽培が盛んである。昭和初期までは養蚕が盛んであったが、需要の低下で果樹が主力の農産物となった。県内の標高差による寒暖差により産地リレーを行っている。甲府盆地は山地に囲まれており、降水量が少なく、日照時間が長く、一日の気温差が大きいため果樹栽培に適している。山梨県は全国１位の生産量のぶどう、もも、すももや、全国３位の収穫量のおうとうの栽培が盛んであり、山梨市はこれらを中心に生産している地域である。

農村研修の目的

研修の目的は、法人経営のメリットや地域農業への貢献、果樹農家における新規就農の実態把握、農閑期を含めた果樹農家の一年間の把握である。2020 年農林業センサスによると、山梨県山梨市は法人経営体の農家より個人経営体の農家が圧倒的に多い。果樹農家は小規模農家が多いが、法人経営を行うメリット、地域への貢献について考えたい。また、新規就農者調査の令和３年の調査結果によると、若年層の雇用就農が増えている傾向にある。若手の従業員の雇用を行っている大沢農園の状況を伺うとともに、山梨県全体の就農状況についても把握したいと考えた。研修期間は、主力の果樹の収穫を終了した時期であったが、農閑期を含めた果樹農家の生活を把握したいと考えた。

農村研修の内容



①いちごのマルチ張り、樹木の伐採等

農閑期の作業として、ハウス内に植えられたいちごの苗にマルチを張る作業をした。また、古くなったおうとうの木の伐採、IPM と呼ばれる減農薬が期待できる農薬の散布やみどりモニタと呼ばれるハウス内の温湿度を管理できる装置について学んだ。



②果樹産地の基盤整備状況の視察

基盤整備事業で整備された樹園地や、経営構造対策事業で導入されたおうとうの雨除けハウスの視察や周辺の樹園地の状況を視察した。写真は、斜面の樹園地を階段状に整備した様子である。また、現在整備中の農地も視察した。



③山梨県産ワインについて

山梨県内のワイン関係者の会合に参加し、醸造家やワイン用ぶどうの生産者のお話を伺った。就農の経緯や、栽培するぶどうの品種、製法、有機栽培をするか否かなどの生産者の個性を知ることができた。また、ワイナリーの見学を行い、山梨県産ワインについて学んだ。

研修の成果・農林水産省で活かしていきたいところ

今後の農業に必要と考えるのは、農業を取り巻く状況への柔軟な対応、新規就農者の増加と定着への取り組みである。大沢農園では、剪定した樹木を肥料として利用することや、天敵を利用した害虫の防除を行うことで農薬の使用を減らすなど、従来のやり方にとらわれず、工夫して農業を行っている。また、新型コロナウイルスの蔓延で観光農園の来園者が減少し、現在来園者数は回復傾向にはあるが、今後の経営にあたっては安定的な販路の確保が必要である。また、温暖化により、主要品目のおうとうの栽培が難しくなっていることから、栽培する作物の転換も必要となってきている。このように、農業をとりまく状況が常に変わる中で、臨機応変に対応していくことが重要と思った。

果樹の新規就農の支援としては、人材を募集している農家と新規参入者のマッチングが重要であると考える。大沢農園では、「あぐりナビ」で募集を行っているが、長期安定的に社員を確保するため、新卒の採用を増やしたいとのことだった。就農のハードルを下げるため、雇用就農を推進することや、学歴や学部学科等に関わらずインターン等の就農体験の場を設けることで多様な人材の確保ができるのではないかと考える。

研修を通じて、果樹栽培の地域特有の産地形成を維持するにあっては、若手の人材育成や地域のつながりの維持形成が重要であると感じた。雇用就農者が、技術やあらゆる面で支援を受けられるという点で、大沢農園のような果樹産地の維持や人材育成を担う農家の存在が必要であると考える。

謝辞

研修では、農作業の大変さ、面白さ、体を動かして働くことの充実感を味わいました。また、農業者一人一人が農業への様々な思いや考え方を持っており、それぞれが目指す農業に向かって努力している姿が印象に残りました。大沢農園の皆様や山梨県庁の皆様には様々な経験をさせていただき、大変感謝しています。今後はこの経験を活かし、農業者の思いを受け取り、自ら考え行動する姿勢を持って業務に励んで参りたいと思います。